源六原遺跡

発掘調査概報

直川村埋蔵文化財調査第１集

1993

直川村教育委員会

源六原遺跡

発掘調査概報

直川村埋蔵文化財調査第１集

1993

直川村教育委員会

序　文

直川村では、魅力ある村づくりのために、ふるさとづくり特別対策事業を平成２年度から着手しました。

特に「スポーツレクリェイションゾーン」としての施設整備計画の事業地内に遺跡の散在する「源六原」があり、現地の工事に伴い、緊急に「源六原周知遺跡発掘調査」を行なう事となりました。

遺跡の主体は、縄文時代早期と弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡であり、約８千点にのぼる縄文早期の土器が出土し、広範囲に散らばる土器片や石鏃の分布は人の生活や住居の跡をしのばせます。源六原遺跡では弥生時代の土器も多数出土しており、中でも１１カ所の竪穴住居跡は、その出土土器からみましても数単位の家族集団が生活していたことに思いを馳せることができます。

残念ながら、遺跡の現状保存は不可能になりましたので、記録保存の措置を施しましたが、ここに刊行します本書が、今後の学術研究や郷土史学習の資料として活用していただければ幸に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に際し、ご指導、ご協力をいただきました大分県文課をはじめ関係各位に対しまして深く感謝申し上げます。

平成５年３月

直川村教育委員会

教育長　小　野　　山

例　　言

1、本書は直川村教育委員会が大分県教育委員会文化課の指導のもとに、平成3年度に実施した大分県直川村大字上直見字源六原にある遺跡の発掘調査概報である。

2、本書の執筆、編集は大分県文化課高橋徹が行ったが、石器・土器の実測やトレース、観察表の作成等で県文化栗田勝弘、同牧尾義則、同綿貫俊一、大分市教育委員会坪根伸也、同高畠豊、同井口あけみ、諸氏の手をわずらわせ、多大の協力を得た。

3、調査および出土品の整理には多くの地元作業員の協力を得た。調査団の構成は以下の通りである。

事業主体者　直川村

調査主体者　直川村教育委員会

調査員　高橋　徹（大分県教育庁文化課）・栗田勝弘（大分県教育文化課）
綿貫俊一（大分県教育庁文化課）

補　助　柳井二生（直川村教育委員会管理課長）・大司正治（直川村教育委員会管理課長補佐）・橋迫又右衛門（直川村教育委員会社会教育指導員）

事務員　矢野美沙・高橋美津代

作業員　安藤八重子・小野マキエ・河野吉恵・柳井利子・柳井ひろ子・広田八千代・多田弥美子・高浜年子・河村シズ子・大竹やす子・篠原マキエ・村上タケコ・桜井サト江・工藤利子・河合ハツ子・河合ユキ子・河合和子・河合サツ子・田野キミエ・守永弘子・染矢直子・佐藤ノリ子・三宮昌子・小野信子・近藤やす子・間京子・吉良山クニ子・伊東キヌエ・渡辺一雄・森竹八千代・河内一夫・小野巴・梅田キクヨ・矢野喜代子・河合サダ子・小野エミコ・河内ハル子・小野晴代・大杉信隆・小野文久・小野ヨシ子

協力会社　河村建設株式会社・曽宮土木有限会社・三幸建設有限会社・守永建設株式会社・近藤建設・赤木建設

本文目次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　地理的・歴史的環境……2
Ⅲ　調査概要……6
Ⅳ　まとめ……30

挿図目次

第1図　大分県の地域概念図……2
第2図　直川村内主要遺跡位置図……3
第3図　直川村出土の縄文土器……4
第4図　直川村出土の縄文土器……5
第5図　源六原遺跡の調査区位置位置図……7
第6図　源六原遺跡調査区出土遺跡および遺構配置図……8
第7図　源六原遺跡出土土器実測図(1)……12
第8図　源六原遺跡出土土器実測図(2)……13
第9図　源六原遺跡出土土器実測図(3)……14
第10図　源六原遺跡出土石器実測図(1)……17
第11図　源六原遺跡出土石器実測図(2)……18
第12図　源六原遺跡出土石器実測図(3)……19
第13図　源六原遺跡遺跡1号住居跡実測図……21
第14図　源六原遺跡3号・4号住居跡実測図……22
第15図　源六原遺跡3号住居跡出土の土器実測図……24
第16図　源六原遺跡4号住居跡出土の土器実測図……25
第17図　源六原遺跡7号住居跡実測図……26
第18図　源六原遺跡7号住居跡出土の土器実測図……27
第19図　源六原遺跡9号・10号住居跡実測図……28
第20図　源六原遺跡11号住居跡実測図……29

Ⅰ　調査に至る経過

直川村の人口は、昭和30年の5410人をピークに減少を続け、平成２年には3424人となっている。村では活性化を図るべくさまざまな政策が展開されてきた。

なかでも平成２年度に10年後の平成12年を目標にして作成した「直川村基本構想・基本計画」では、村のイメージアップを図り、若者に魅力あり、子供から高齢者まで楽しめる施設の建設が計画された。

小さな村にとって一大プロジェクトである。赤木中道地区のキャンプ場整備、鉱泉センター建設と上直見向船場地区に６ホールのミニゴルフ場、テニスコート、ゲートボール場、芝スキー、多目的運動広場等を備えた観光・レクリェーション施設の建設計画である。

しかし候補地の選定を進めるなかで向船場地区の源六原台地は周知遺跡であり、簡単に開発ができない地域であった。そこで村は急遽用地取得を完了し、記録保存のための発掘調査を行うことを決定した。大分県教育庁文化課の指導・助言をいただいて、文化庁より平成３年２月に発掘許可を受けることができました。

さらに直川村教育委員会関係者には発掘調査に携わるだけの知識も経験もなく、県文化課に発掘を依頼しましたが、県は九州横断自動車道関連の発掘調査を行っており、市町村まで手が回らないとの返事であったが再三のお願いに文化課高橋主査を主任とする調査団を派遣して下さり、発掘調査を実施することができた。

発掘調査は平成３年４月16日から開始し、９月中旬に完了した。途中梅雨期、炎暑もあって調査は困難を極めたが、作業員の協力もあり、計画どおり終了することができた。９月下旬から遺構の現地見学会や遺物の整理や拓本整理を行い、３月末には全ての調査を完了した。

II　地理的・歴史的環境

直川村は大分県南部に位置する。弥生町、本匠村、宇目町、佐伯市および宮崎県北川町に接している。村域の大部分は山地で、標高200～400㍍の山々に囲まれており、南海部郡に属する。村の中央部を南西から北東に流れる久留須川は横川川や赤木川を合わせて、南郡随一の河川である番匠川に合流する。村の台地や低地はこれらの河川沿いに分布する。

久留須川周辺の台地にはいくつかの縄文遺跡が点在する。道越遺跡、下口遺跡、上ノ原遺跡、神ノ原遺跡、源六原遺跡などである。今回調査の対象となった源六原遺跡以外は正式な調査がなされておらず、表面採集される遺物を根拠に遺跡の存在を推定しているにすぎない。採集された遺物の多くは縄文早期や後期・晩期

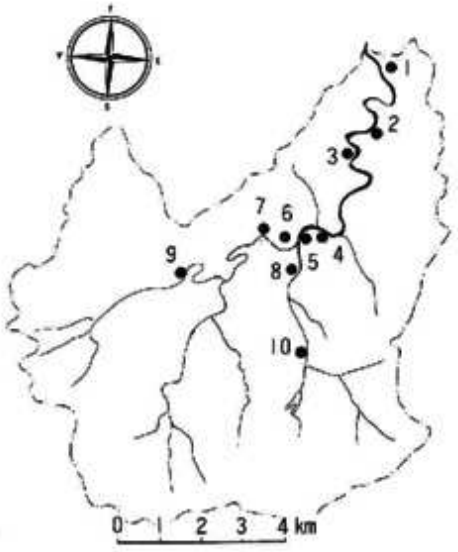
第1図　大分県の地域概念図

の土器片や石鏃で、そのほかに極少量ながら古墳時代の土師器が確認されている。

直川村域は古代にあっては、海部郡に属し、中世には佐伯荘の一部であった。大字赤木字シルエに所在する功休庵跡宝篋印塔は、鎌倉時代末期(正慶元年：1331年）の紀年銘を有し、他にも村内には層塔や板碑、石幢などの石造物が数多く残っている。

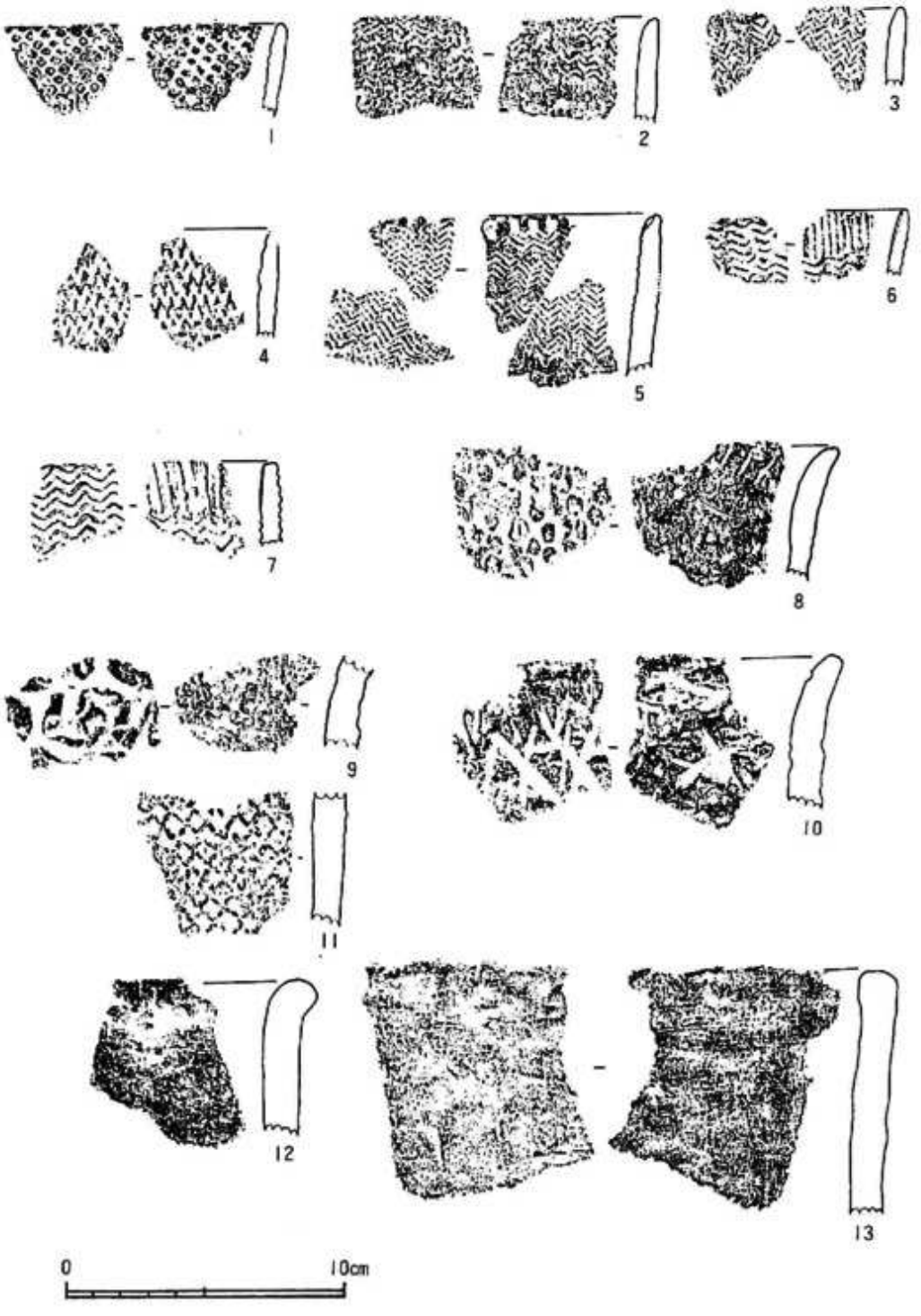
直川村出土の遺物

第３図１～13は縄文早期に属する土器群で、１～４が稲荷山式、５～７が早水台式、８～９が田村式に比定される。12、13は内外面とも無紋の深鉢である。14、15は縄文前期、16～22は縄文後期の阿高系土器や鐘ヶ崎式土器、三万田式土器等である。図示していないが、直川中学校所蔵の資料中に、山形丸底壺が２点存在する。これらは口径８cm内外、器高９cm弱に復原される土師器で、色調は赤褐色。比較的焼成の良好なもので、古墳時代前期に位置づけられるものであろう。

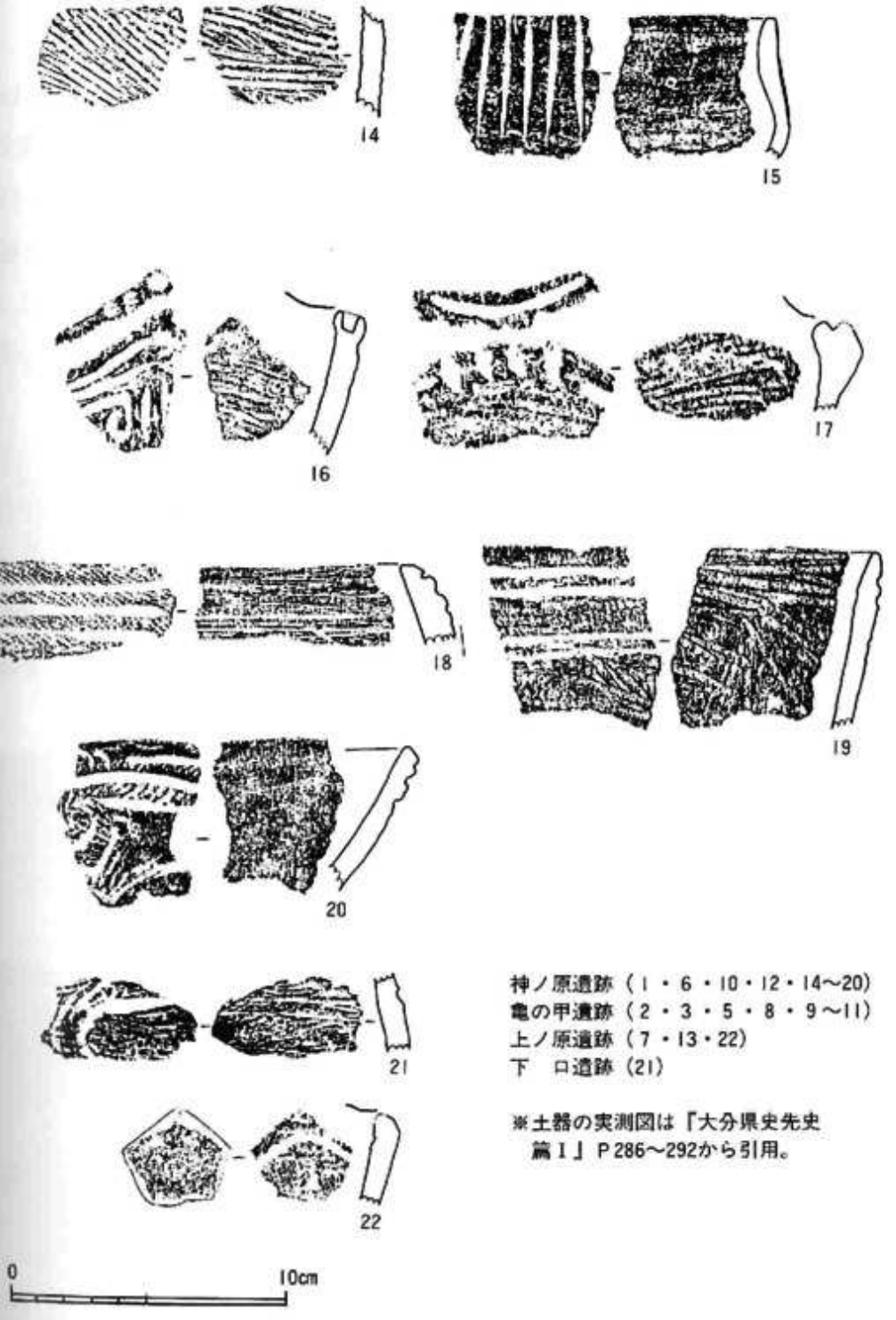


1．下口遺跡
2．道越遺跡
3．上直見上ノ原遺跡
4．源六原遺跡
5．向船場遺跡
6．上ノ原遺跡
7．神ノ原遺跡
8．市屋敷遺跡
9．亀の甲遺跡
10．中津留遺跡

第２図　直川村内主要遺跡位置図



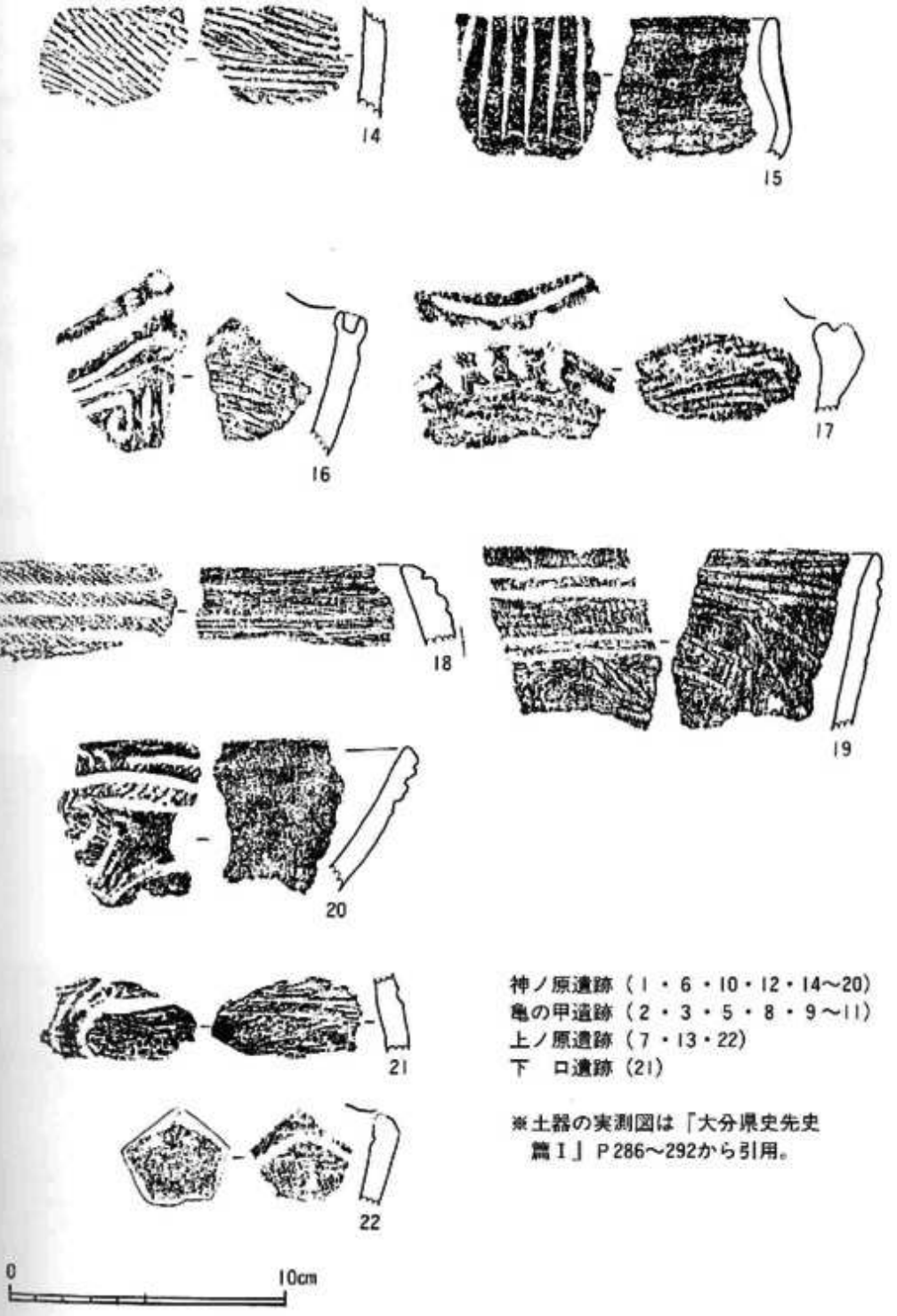
第３図　直川村出土の縄文土器



神ノ原遺跡（1・6・10・12・14～20）
亀の甲遺跡（2・3・5・8・9～11）
上ノ原遺跡（7・13・22）
下　口遺跡（21）

※土器の実測図は『大分県史先史篇Ⅰ』P286～292から引用。

第4図　直川村出土の縄文土器



神ノ原遺跡（1・6・10・12・14～20）
亀の甲遺跡（2・3・5・8・9～11）
上ノ原遺跡（7・13・22）
下　口遺跡（21）

※土器の実測図は「大分県史先史篇Ⅰ」P286～292から引用。

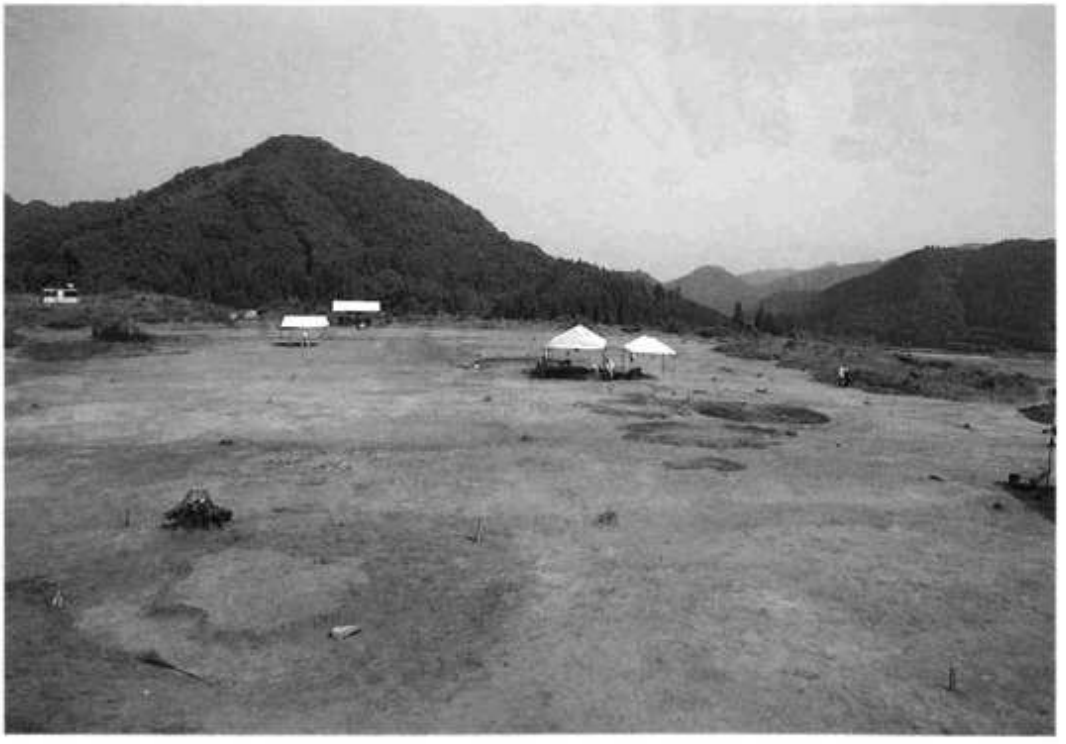
第4図　直川村出土の縄文土器

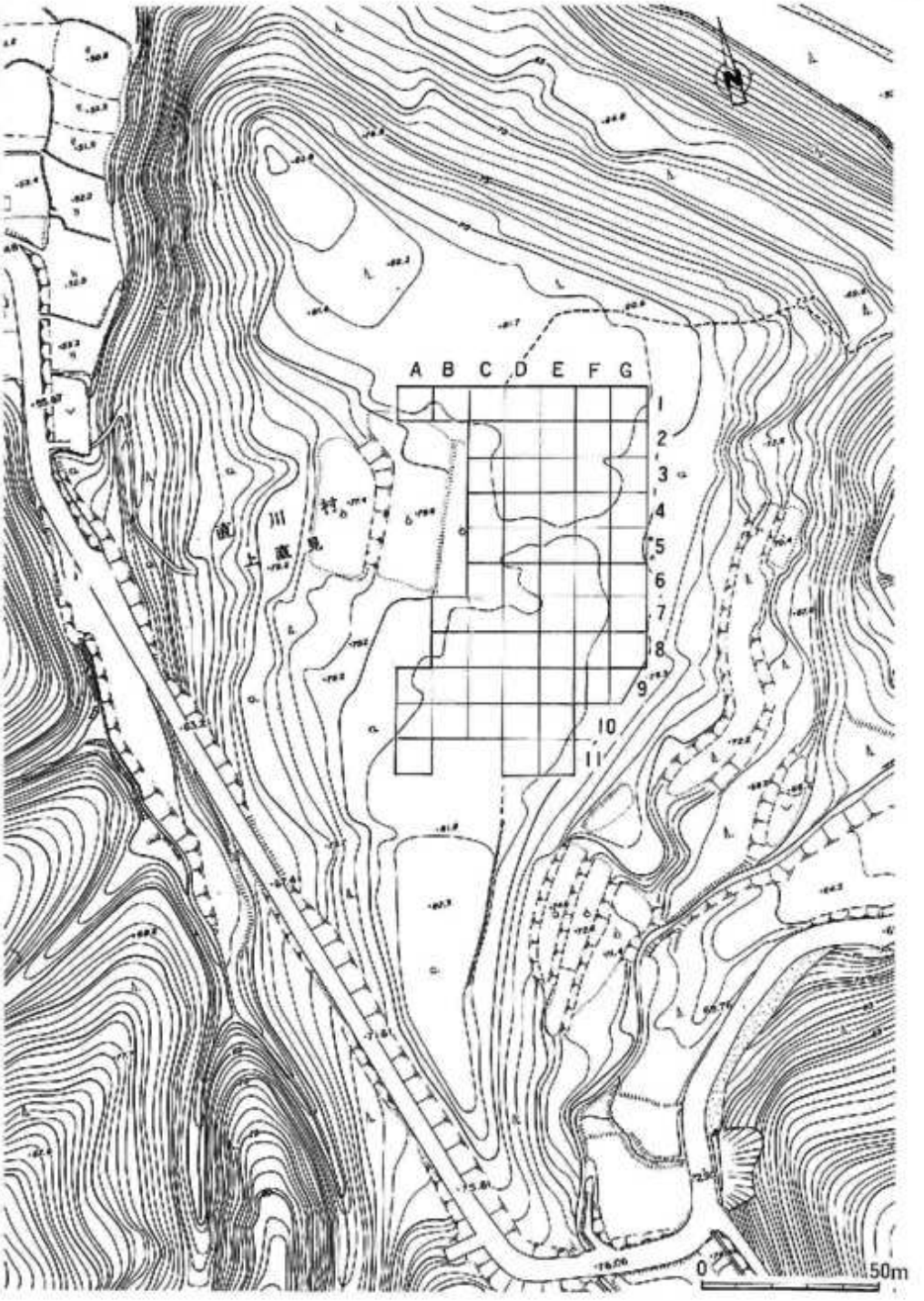
Ⅲ　調査概要

源六原遺跡は直川村大字上直見字源六原にある。上の原遺跡から南西へ約1.7kmの久留須川の南にある標高約80mの台地に立地する。本遺跡では、以前から縄文土器や石鏃が採集されていた。この台地全体を対象にして、重機による試掘を行い、遺物の有無をもとに本調査区を設定した。調査区の面積はおよそ１万㎡を越すことになった。調査区には10m×10mを一単位とする方形のグリッドを設定し、これを順次掘り下げていった。

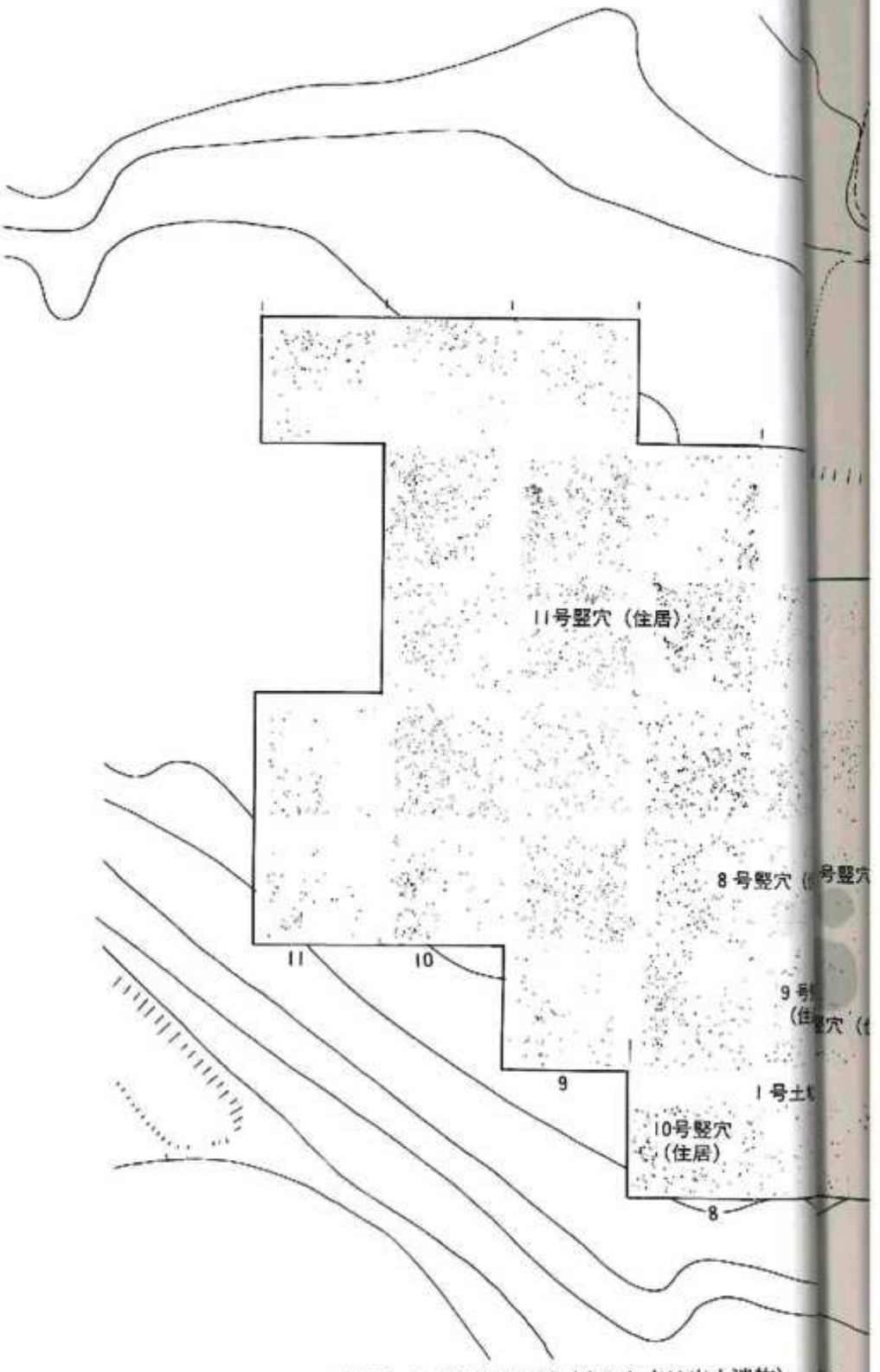
縄文時代

台地の平坦面のほとんど全域から縄文早期の土器が出土し、その総数は8000点を越す。縄文時代の遺構としては２基の集石遺構を検出しただけである。土器は耕作土の下にある黄褐色の火山灰土層に含まれていたが、後世の耕作などによる攪乱が著しい。上記の火山灰土の所々に明黄橙色をした「アカホヤ火山灰」が認

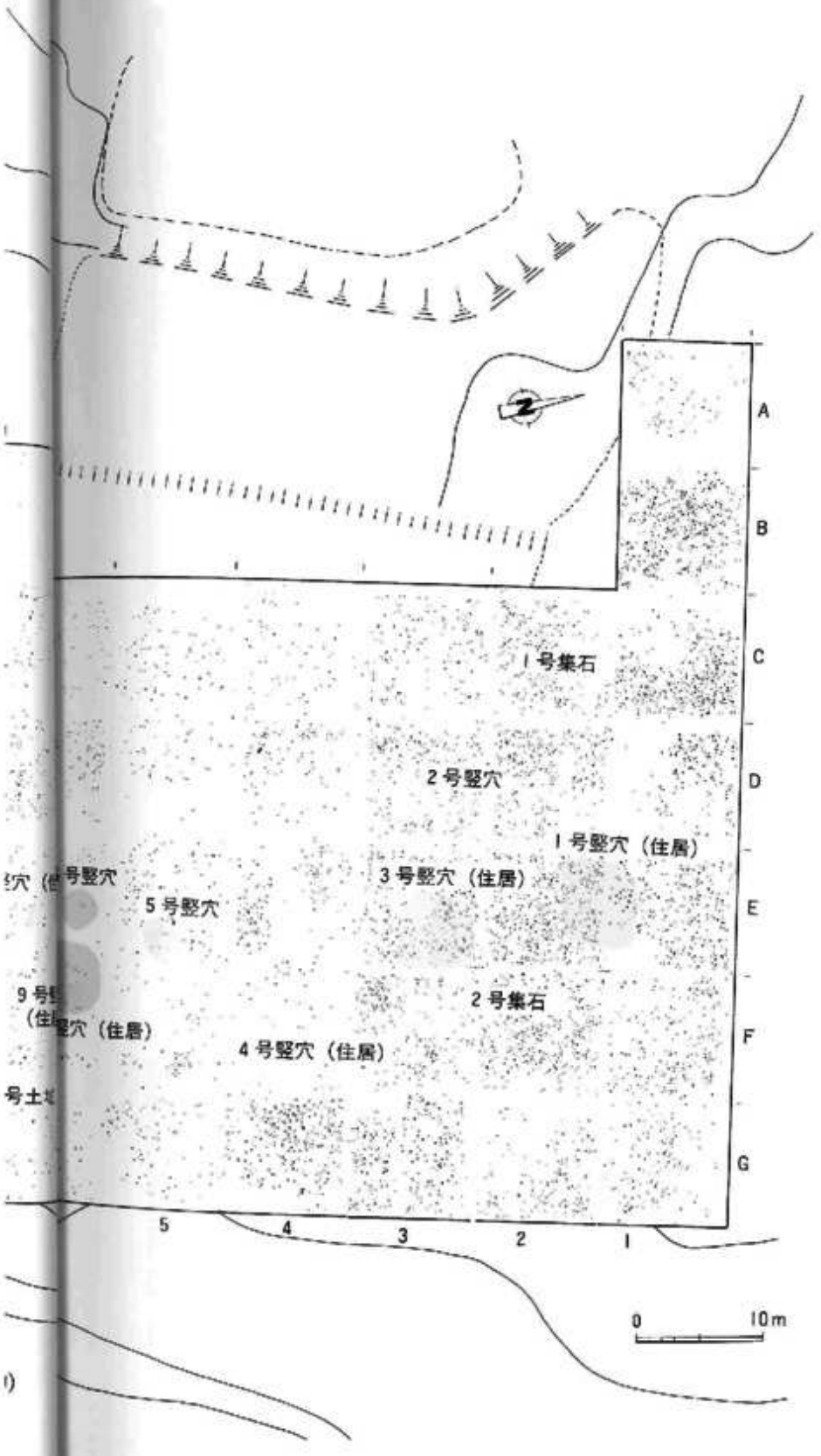




第５図　源六原遺跡の調査区位置図



第６図　源六原遺跡調査区出土遺跡および遺構配置図（小さな点は出土遺物）

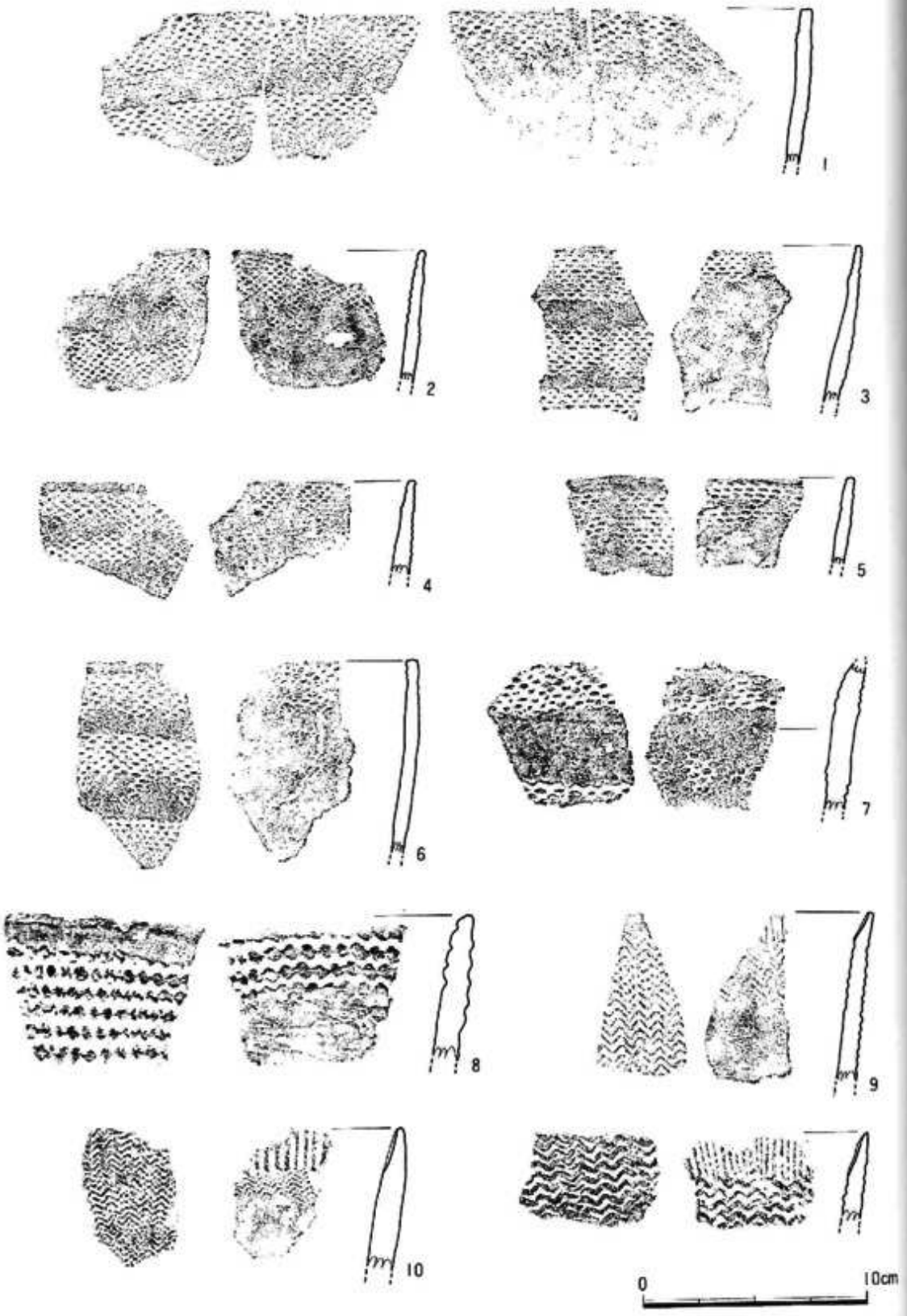

A
B
C
D
E
F
G
1号集石
2号竪穴
1号竪穴（住居）
3号竪穴（住居）
5号竪穴
2号集石
4号竪穴（住居）
5
4
3
2
1
0
10m

められた。これは鹿児島県南方沖合いにあった鬼界カルデラ火山が今からおよそ6000～6500年前に噴火した時の噴出物で、噴出地に近い鹿児島では厚さ１m以上の堆積がみられる。空高く舞い上がったアカホヤ火山灰は西風にのって日本列島を広く覆い、遠くは関東地方まで達していることが確認されている。それほど期間をおかずに広い範囲に降り積もったこの火山灰は、遠く離れた地域にある遺跡や遺物を比べるにあたって、共通の時間的なものさしとなっている。

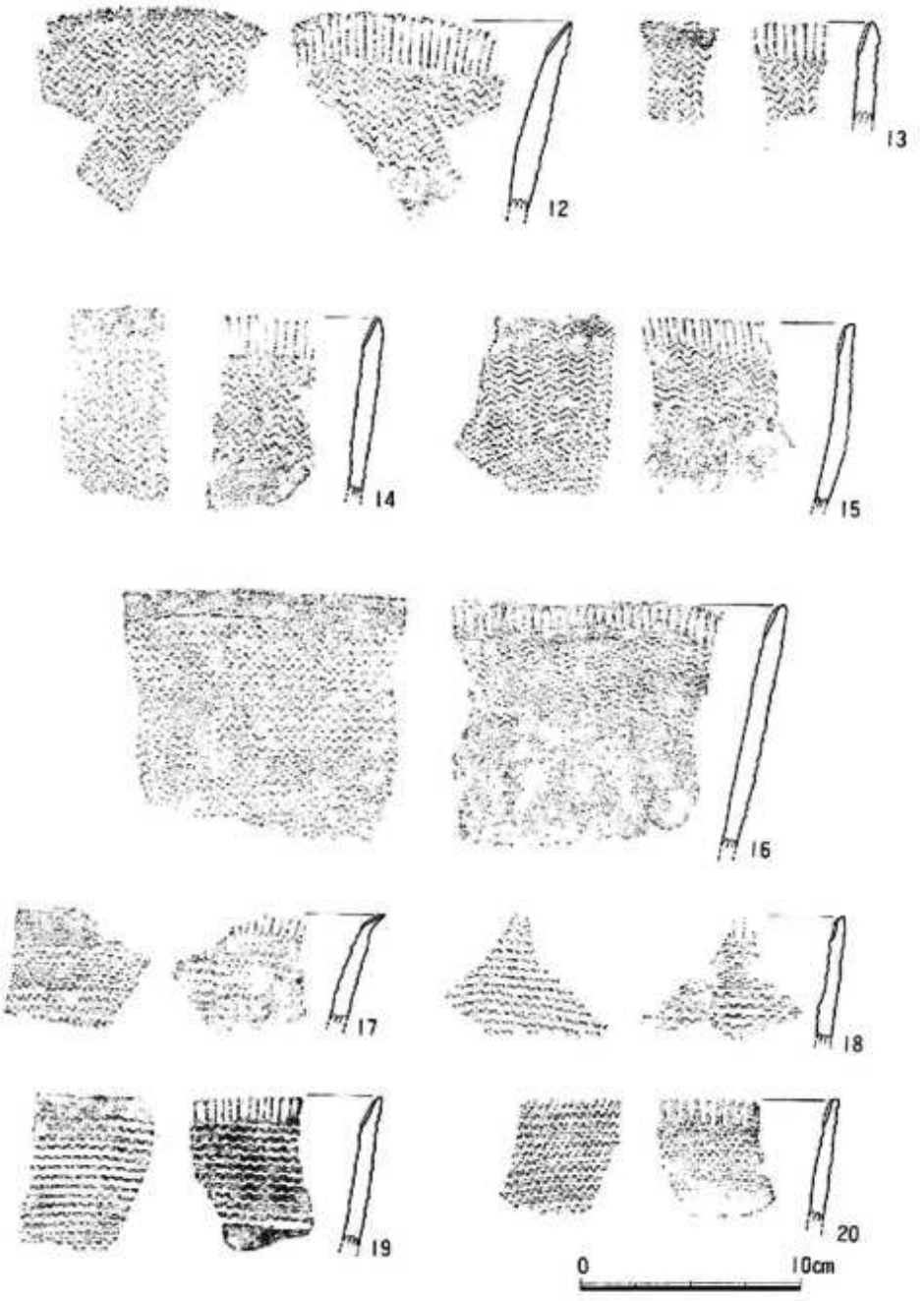
源六原遺跡から出た縄文土器のほとんどは押型文土器で、これに打製の石鏃多数、環状石斧が伴う。

土器

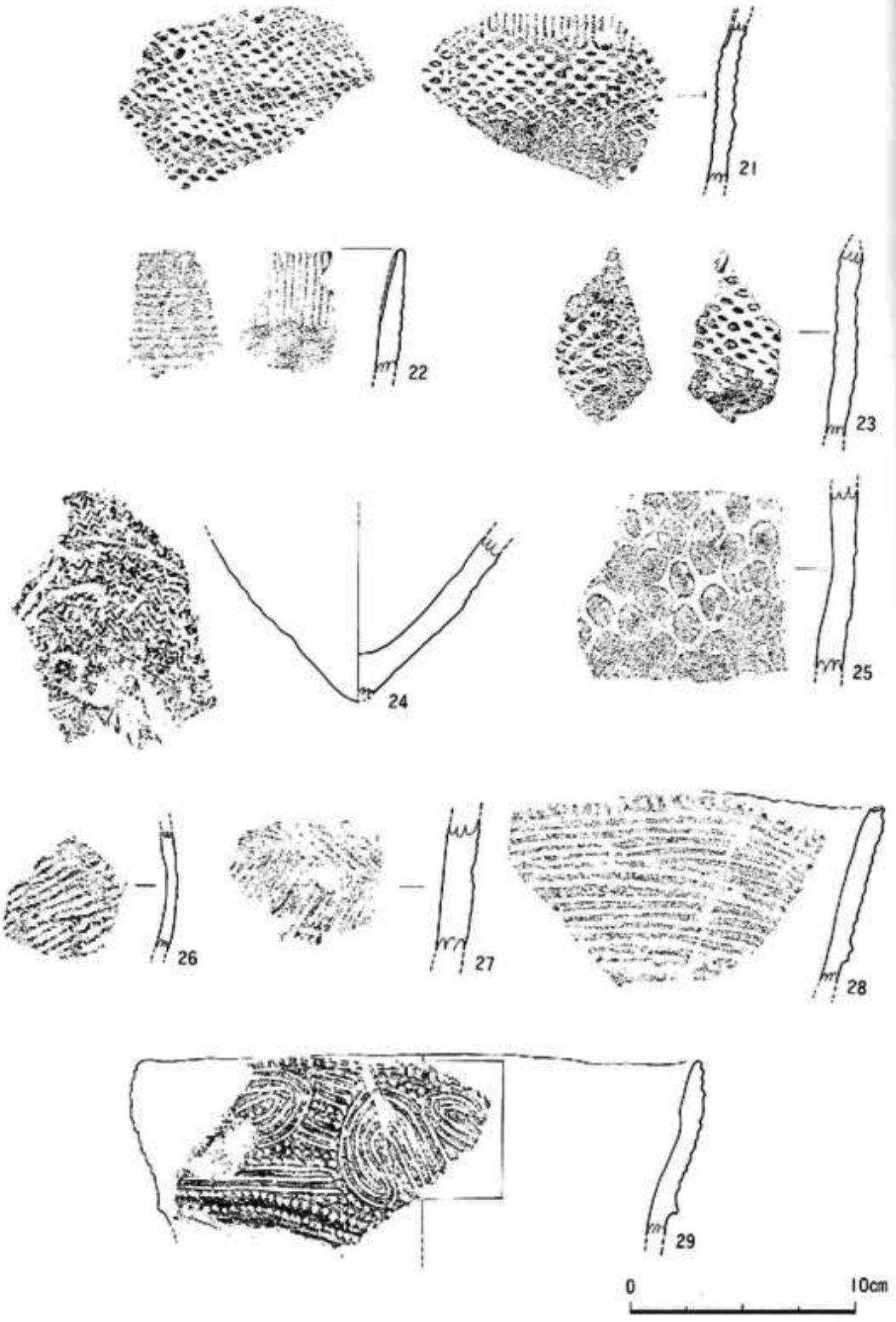
押型文土器は細い粘土紐をくるくると巻き上げて造ったもので、底部は細く尖り、口の部分（口縁部という）は大きく開いている。尖り帽子を逆さにしたような形である。生乾きの段階で、長さ２～３cm、太さ径１cm程度の文様を刻んだ棒状の施文具を土器の表面に押しつけながら回転していく。その結果、土器の外面には一定の間隔で繰り返される凸凹のある連続文様が施されていく。施文具に刻む文様は、山形文や楕円が殆どである。こうして装飾された土器は乾かされ野焼きによって焼き上げられる。およそ600～700度くらいの低い焼成温度と思われる。このとき土器の粘土中に含まれる酸化鉄が炎のなかの酸素と反応するため、土器の表面は全体黄あるいは赤褐色になる。土器外面になにも文様を施さないものも出土するが、これは無文土器とよばれている。製作技法や形は押型文土器に似ている。これらの押型文土器や無文土器にはまれに煤の付着痕があり、実際に煮炊きに用いられていたことがわかっている。一般に、土器は、貯蔵や収納、煮炊きに用いる容器である。死者を納めれば埋葬用の棺となる。縄文時代草創期や早期の土器がどのような目的で作り出されたものか、実はあまりよくわかっていない。名古屋大学の渡辺誠教授は、縄文時代になって広がっていった広葉樹や照葉樹の森で沢山採集できるようになった、どんぐりの類を渋抜きしたり、植物から澱粉を抽出するために土器が発明されたという説を提出している。これにたいし國學院教授の小林達男教授は、縄文時代になって始まる貝や牡蠣などの補食に注目し、



第７図　源六原遺跡出土土器実測図(1)



第８図　源六原遺跡出土土器実測図(2)



第９図　源六原遺跡出土土器実測図(3)

源六原出土縄文土器遺物観察表

遺物番号	出土区	胎土	色調	備考
1	5 G-122	石英粒を少量含む	内・外面茶褐色	川原田式土器
2	5 D-142	角閃石、長石を少量含む	内面黒褐色、外面淡茶褐色	川原田式土器、内面に煤の付着が認められる。
3	5 F表土	長石を微量含む	内面淡黄褐色、外面茶褐色	川原田式土器
4	5 P-50	長石を微量含む	内・外面茶褐色	川原田式土器
5	5 F-39	角閃石、長石を少量含む	内面茶褐色土	川原田式土器
6	5 F-193	角閃石、石英粒を少量含む	内面、外面明茶褐色	川原田式土器
7	5 E-319	長石を少量含む	内面淡茶褐色、外面茶褐色	川原田式土器
8	4 F-39	石英粒、長石、角閃石を少量含む	内面淡茶褐色、外面茶褐色	稲荷田式土器
9	5 E-371	角閃石、石英粒を少量含む	内面明茶褐色、外面茶褐色	早水台式土器
10	5 G-108	石英を少量含む	内面茶褐色、外面暗茶褐色	早水台式土器
11	5 G表土	角閃石を少量含む	内面明茶褐色、外面茶褐色	早水台式土器
12	5 F-257		内面暗茶褐色、外面茶褐色	早水台式土器
13	5 G-197	角閃石を微量含む	内面明茶褐色、外面茶褐色	早水台式土器
14	5 G表土	角閃石を少量含む	内・外面茶褐色	早水台式土器
15	5 E-58	長石を微量含む	内面淡黒褐色、外面明茶褐色	早水台式土器、内面下部に煤の付着が認められる
16	4 H-324	角閃石を少量含む	内面淡茶褐色、外面淡黒茶褐色	早水台式土器
17	5 G表土	石英粒を含む	内面赤茶褐色、外面茶褐色	早水台式土器
18	4 F-57	石英粒を少量含む	内・外面淡茶褐色	早水台式土器
19	4 E-75	角閃石、石英粒、長石を含む	内面茶色、外面茶褐色	早水台式土器
20	5 H-93	長石、石英粒を少量含む	内面暗茶褐色、外面明茶褐色	早水台式土器
21	S J	長石を微量含む	内面黒褐色、外面淡茶褐色	早水台式土器、内面に煤の付着が認められる
22	12H-102	長石、角閃石を若干含む	内面茶色、外面茶褐色	早水台式土器
23	5 F-51	石英粒を少量含む	内面淡黄褐色、外面淡茶褐色	
24	12E-138	角閃石を少量含む	内・外面淡渋褐色	
25	11C-67	角閃石、石英粒を含む	内・外面茶褐色	田村式土器
26	5 G-51	微砂粒を含む	内面淡黒色、外面明褐色	縄文土器
27	5 F表土	石英粒、長石を多量に含む	内面淡黄褐色、外面茶褐色	
28	5 F-156	角閃石、石粒を含む	内・外面淡茶褐色	塞ノ窯式土器
29	5 E-158	石英粒を少量含む	内・外面淡茶褐色	平拵式土器

土器はこれらの煮炊きするために造られたと考えている。

源六原遺跡出土の縄文土器はすべて破片であり、完形品は出土していない（第7図～9図）。1～7は外面に楕円文をベルト状に施文するもので、速見郡山香町川原田洞穴出土例を標識とする「川原田式」に分類される。口縁部内面にも楕円文が施されている。器壁の薄いもの（1～6）とやや厚いもの（7）がある。

5はやや厚手で、外面および内面の口縁部付近に横走する連珠文を有す。杵築市稲荷山遺跡を標識遺跡とする「稲荷山式」の範疇に属するものである。

9～22は外面に横走する押型文、口縁部内面には原体条痕と横走する押型文が施されたもので、押型文の種類は21の楕円文を除いて、すべて山形文。日出町早水台遺跡を標識とする「早水台式」に分類される。源六原遺跡ではこの型式のものが圧倒的に多い。

24の尖底の底部は外面に山形文を施しており、おそらく上記の早水台式押型文土器の底部であろう。

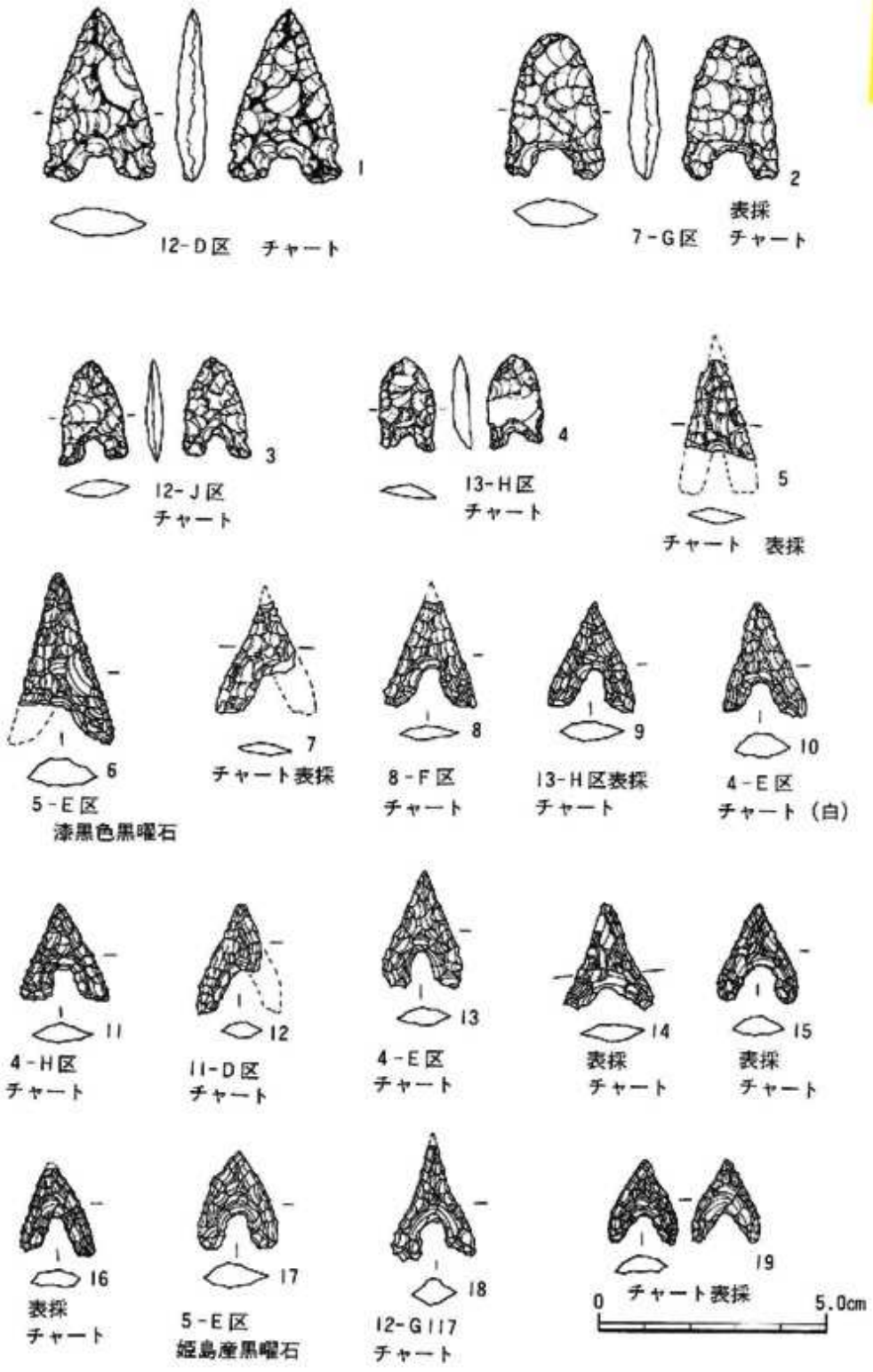
25は大きくかつ扁平な楕円文を外面に施した土器で、いわゆる「田村式」に比定されるものである。当遺跡では数は多くないが出土している。

26は外面に縄文がみられる。27は厚手で、外面は条痕地紋。轟式の範疇に属す。28は条痕の地紋を持つもので、口縁端部に刺突文、口縁部下段に刺突の突帯がある。29は刺突と屈曲する沈線文に飾られた土器で平椿（ひらがこい）式と呼ばれるものである。

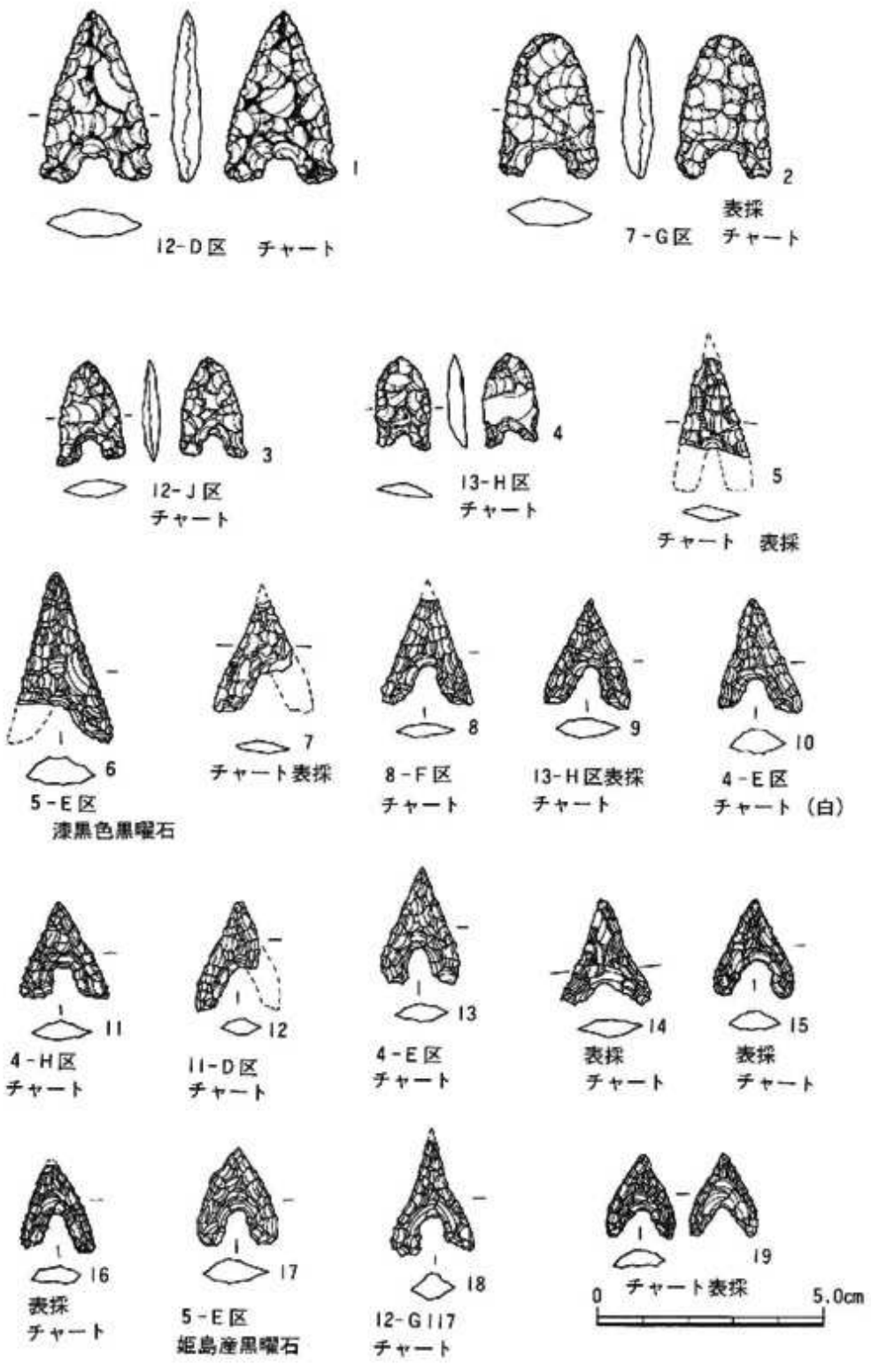
石器

源六原遺跡では確実に貯蔵穴と言えるものは発掘されなかったが、前述のどんぐり類を叩いたり、すりつぶしたりするための道具、すなわち石皿や磨き石、叩き石などが出ている。

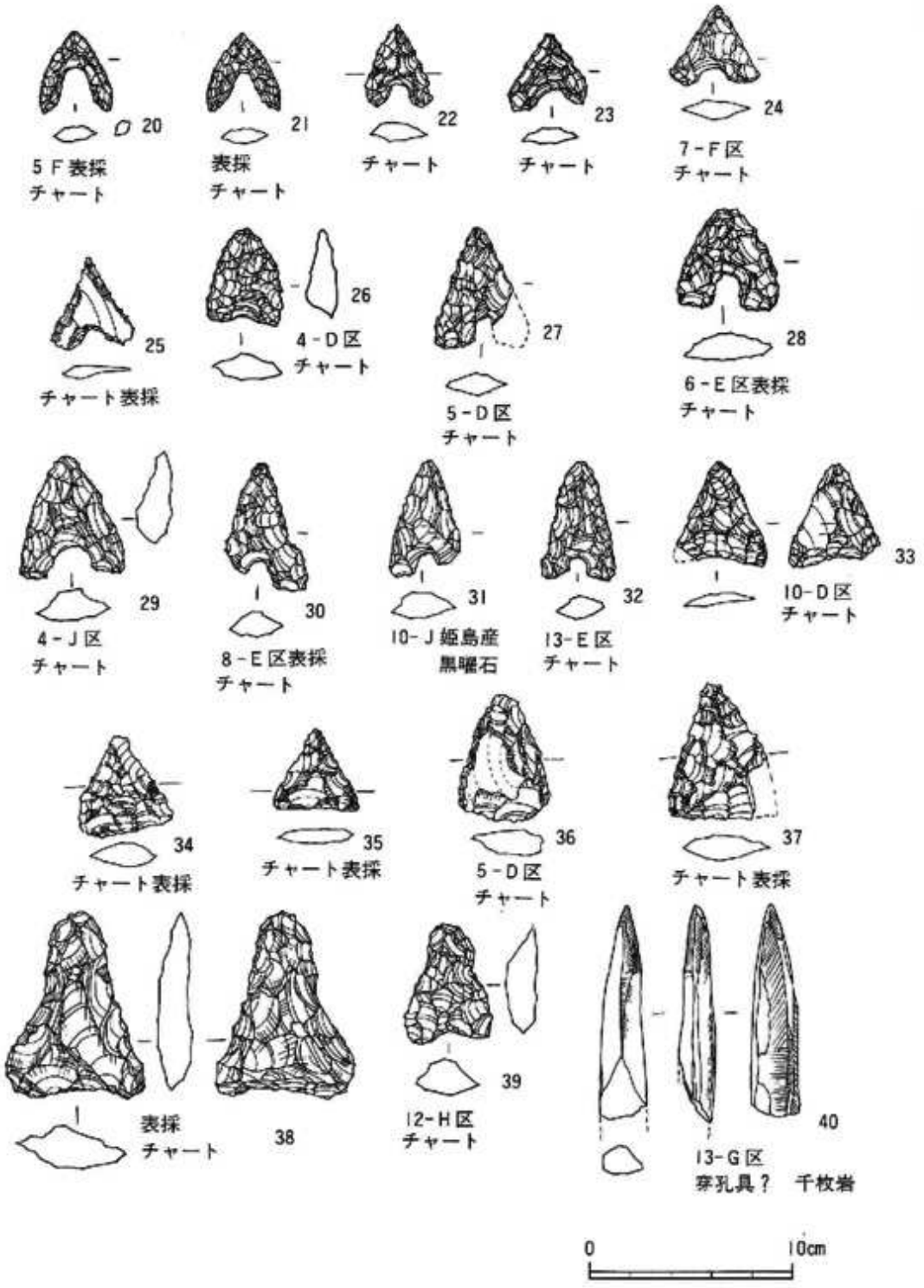
石器のなかで数の多いものとしては石鏃（第10～11図）がある。石材としては姫島産や腰岳産の黒曜石のほかチャートを用いている。1～4はいわゆる「とろとろ石鏃」と呼ばれるもの。5～16は基部の抉が深く両側辺は直線的に先端部へ収束する。20、21は全体ハート形で基部の抉りが非常に深いもの。22～25は三角形で基部の抉りが浅い。33～37は抉りのない平基式石鏃。



第10図　源六原遺跡出土石器実測図(1)

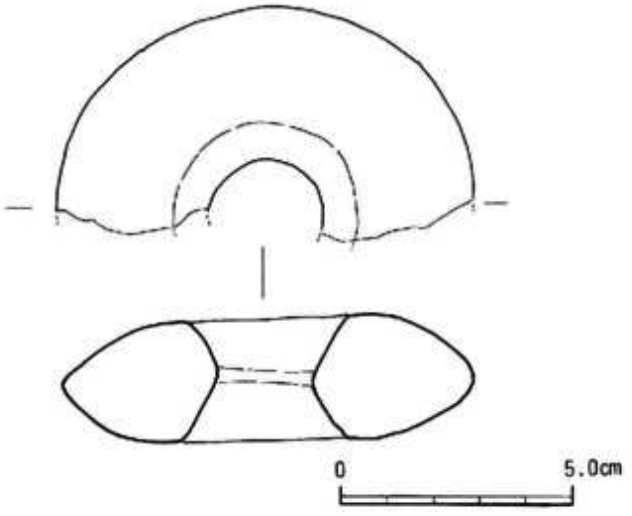


第10図　源六原遺跡出土石器実測図(1)



第11図　源六原遺跡出土石器実測図(2)

その他の石器としては一点だけ、環状石斧とよばれるドーナツ状の石斧が出土している。これは破損しており砂岩製。外径9㎝、内径は2.5㎝に復原される。比較的近くでは、野津町新生遺跡に類品がある。正確な用途は不明の石器である。



第12図　源六原遺跡出土石器実測図(3)

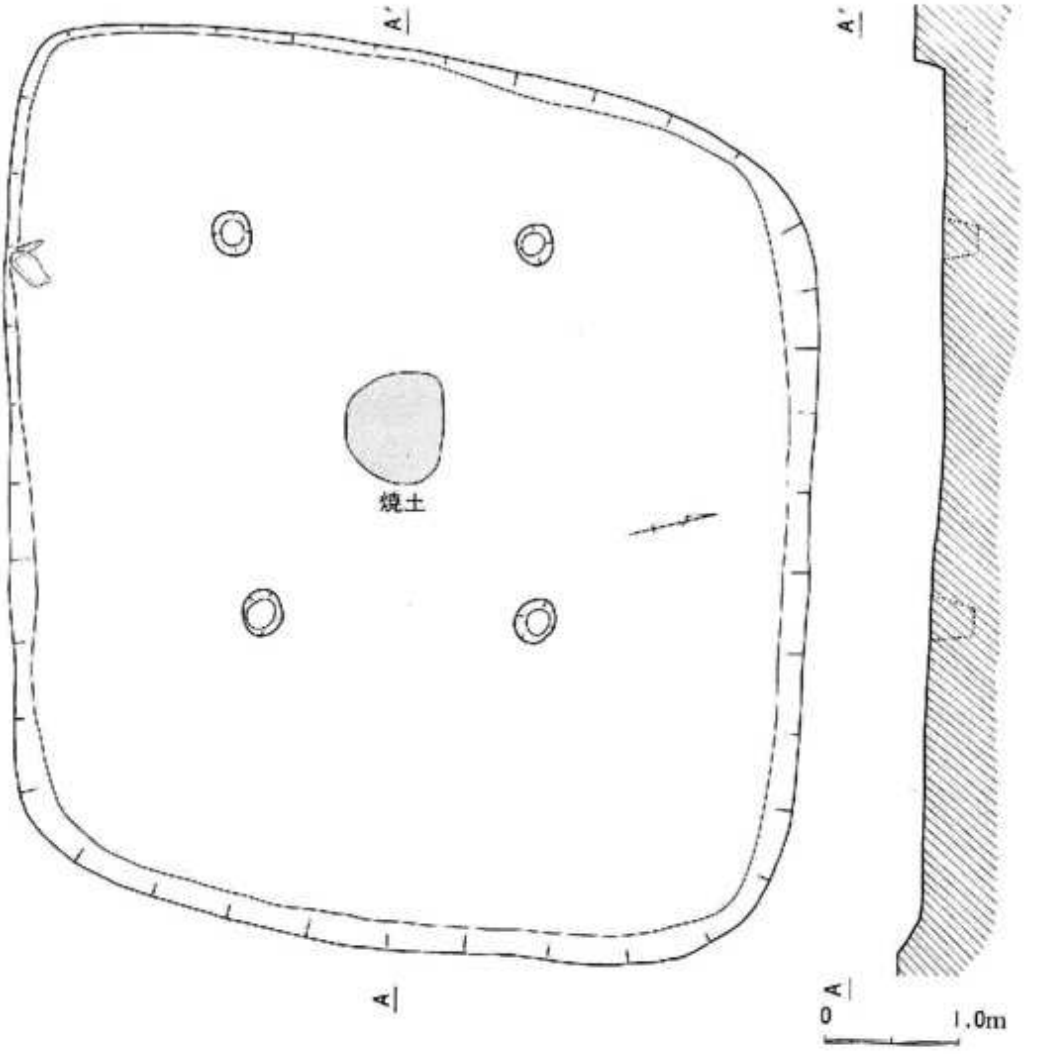
遺構

源六原遺跡では住居の跡は確認されていないが、多量の広範囲に散らばった土器片や石鏃の分布からみてすでに消滅してはいるものの、数軒の住居跡があったと思われる。ちなみに福岡県や熊本、鹿児島県では早期の方形や円形の竪穴式住居跡が調査されている。源六原遺跡調査区北側に、二基の集積遺構があった。拳から人頭大の礫を円形に集めたもので、中心が擂り鉢状にくぼんでいる。民族例から一般にアースオーブンに用いたものと考えられている。

弥生時代

弥生時代とは稲作農耕をもとにした文化が成立し、発展していった時代である。大正時代以来の長い研究の結果、この文化は朝鮮半島南部から九州島にわたってきた稲作農耕民と北部九州在住の縄文人が相互の交流の過程で創りだした農耕文化であることが明らかになっている。その始まりの時期はまだ確定されていないが、およそ紀元前四世紀頃に始まると考える研究者が多い。弥生時代最古の段階で、福岡や佐賀、長崎などでは水田や実った稲を刈り取る石包丁など農耕をしめす証拠が出そろっているが、大分県ではこの段階の土器がみつかっているだけである。大分県下に典型的な弥生文化が定着するのは弥生時代前期である。北部九州で成立した弥生文化は、筑後川経由で日田地方に入ってくるものをのぞけば、福岡県の豊前地方から海岸沿いに、宇佐、国東、別府湾岸と伝わった。この別府湾岸の海岸平野で、大分の弥生式土器が誕生する。下城式と名付けられたこの土器は胴部から直線的に続く口縁部と、その直下にめぐらされた刻目の突帯、外面の刷毛目等を最大の特徴とする甕形土器と、これに伴う壺からなる。現在、最も古い下城式土器は大分市坂の市の下志村遺跡で発見されている。これに続くものとしては大分市下郡遺跡、同雄城台遺跡、宇佐市台の原遺跡などがある。

弥生時代中期になると下城式土器とこれに象徴される弥生文化は別府湾岩を中心に宇佐、国東、臼杵、佐伯、久住、犬飼、三重と、大野川中流域や豊後水道側に南下してくる。弥生時代中期の初めには佐伯市下城遺跡、白潟遺跡などで見られるように、弥生文化の波及が確認できる。源六原遺跡では縄文時代の押型文土器の包含層をほりこんで造った竪穴が11基検出されたが、弥生時代のものとしては1号、3号、4号、5号、6号、7号、8号、9号、10号で、11号竪穴は終末～古墳初頭に降るものである可能性が高い。

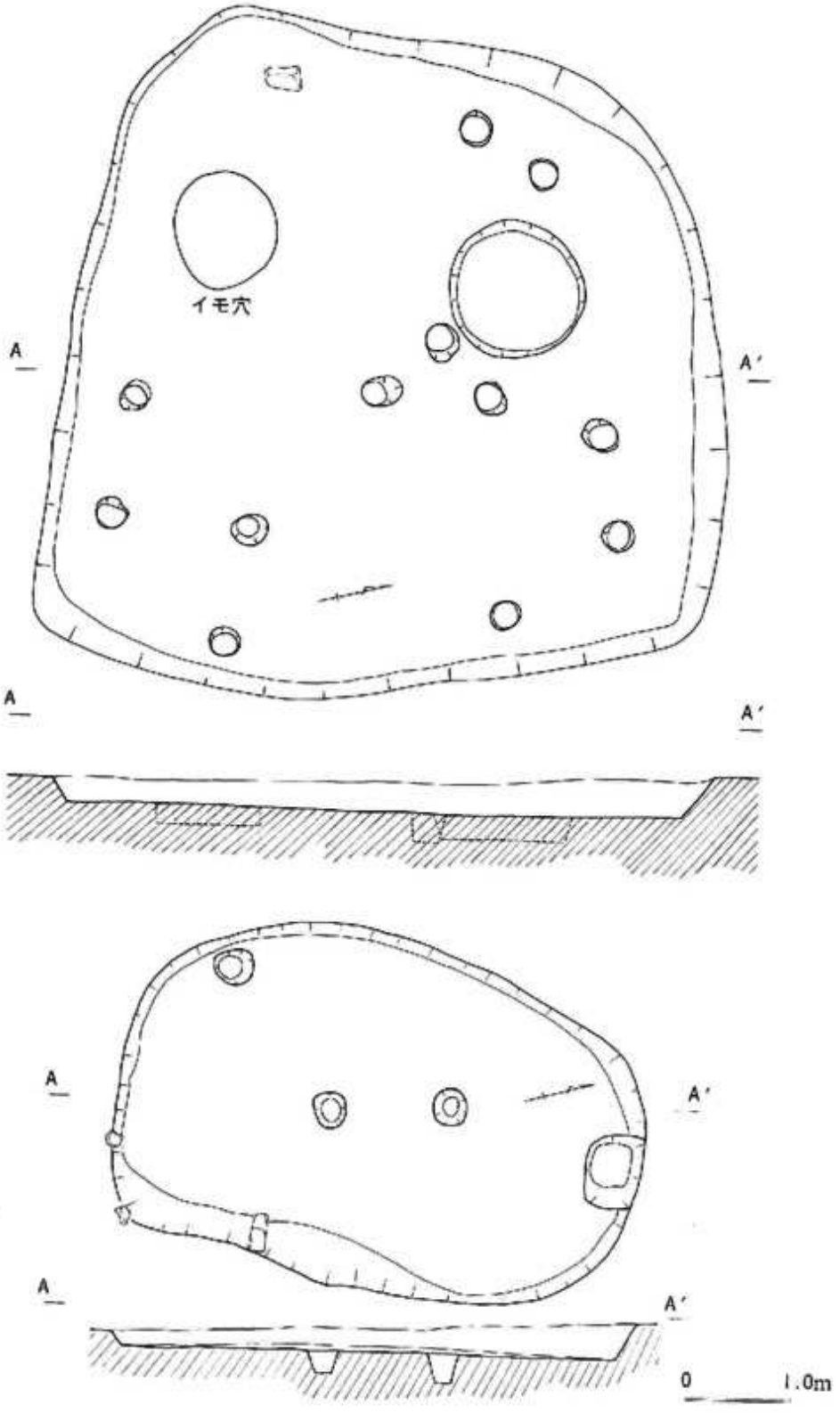


第13図　源六原遺跡１号住居跡実測図

１号竪穴（第13図）

１号竪穴は調査区の最も北側に位置する。平面形は隅丸の方形プランであるが、東、西の辺は主柱穴を結ぶ直線に平行ではなく、整ったものではない。

一辺６ｍ×６ｍ、深さ80cm。床面中央に地床炉を設けた４本柱の住居跡である。



第14図　源六原遺跡３号（上）、４号（下）住居跡実測図

3号竪穴（第14図）

3号竪穴は1号竪穴の南側に位置する。不整形の平面プランで、辺長6m×6mほどで、大きさは1号竪穴のそれに近い。床面に13個の小ピットを検出したが、主柱穴およびその配置を断定することができなかった。経1～1.2mの円形ピットは後世のイモ穴である。

3号竪穴出土土器（第15図1～5）

1は鋤先口縁部の壺形土器で口縁部上面には円形浮文を張り付けている。色調は赤褐色で胎土は精良。焼成も良い。平底の底部とも器外面は平滑に仕上げられている。2は脚付鉢の脚部か？鉢部との境に無刻みの突帯を巡らしている。3、4は下城タイプの甕で、3は直立口縁部の下に2条の刻目突帯を巡らす。外面には細かい縦ハケメを施す。色調は褐色で、胎土にカクセン石を含む。口縁端部は指で平担ななで調製が、行なわれている。4はやや外反気味の口縁部下に1条の刻目突帯を付ける。

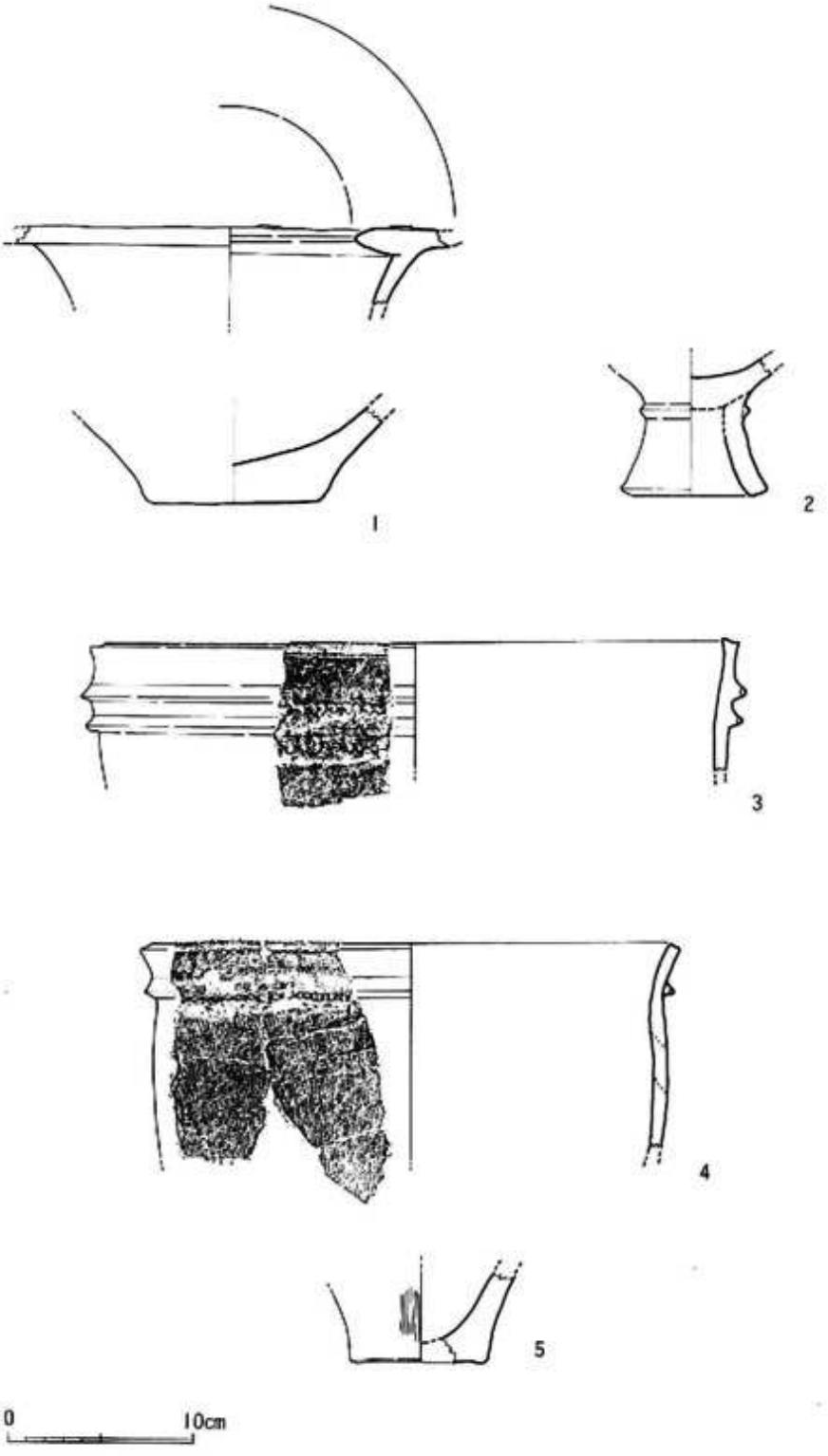
口縁端部と突帯には小さい刻目が施されている。5口甕形土器の底部で底経8cm。茶褐色を呈し、外面に縦ハケメが確認できる。以上の土器群は、弥生時代中期中葉～後葉に比定されるもので、竪穴の時期もこの段階に位置づけられる。

4号竪穴

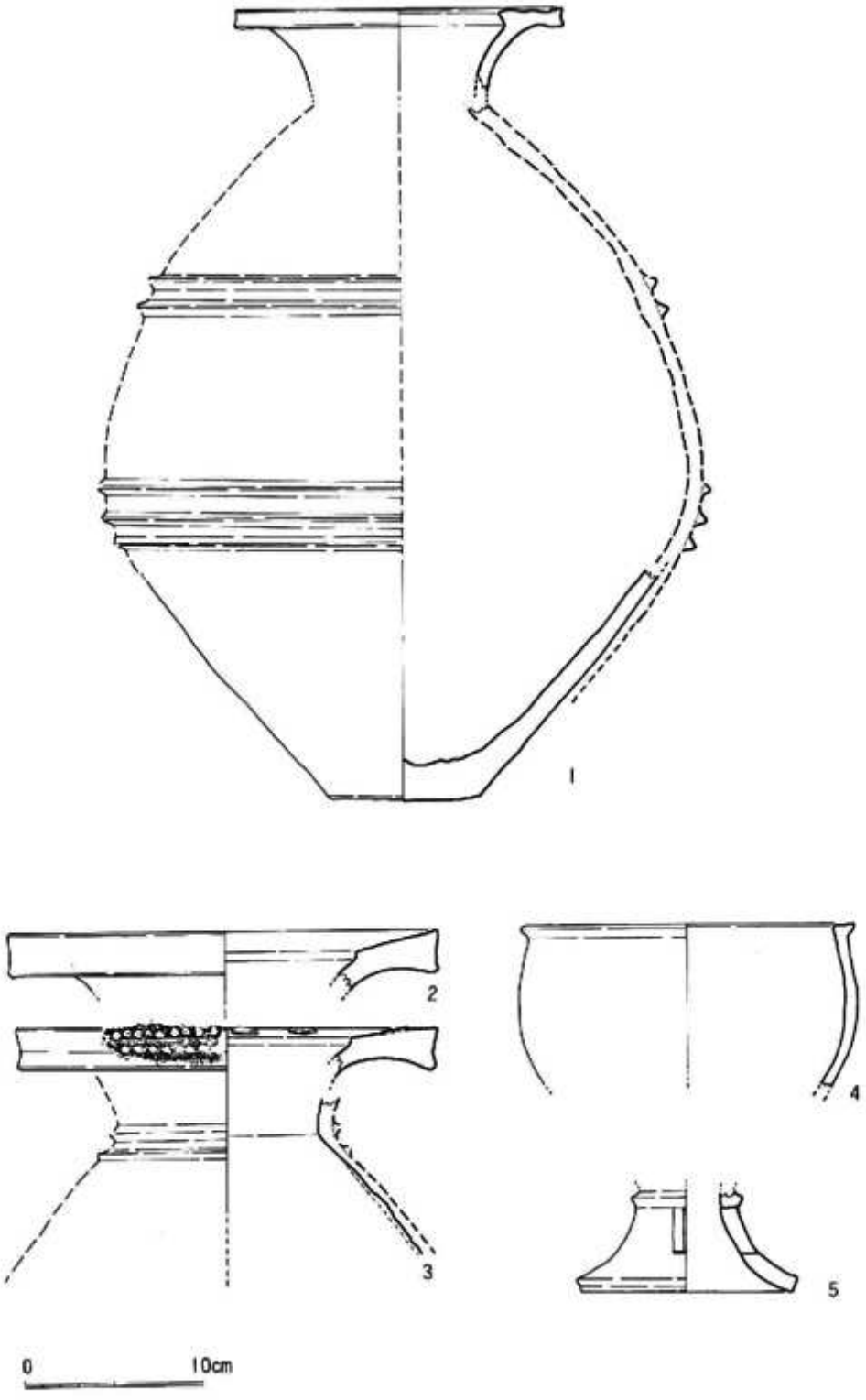
4号竪穴は3号から北東に10mの位置にある。後世の削平で壊されており、遺構としての残り具合は良くなかった。平面形は不整の長楕円形で、長軸5m弱、単軸3.5mを測る。深さは20cmほどである。主柱穴と思われるものは2本で、土器片と台石、磨製石鏃などが出土している。

4号竪穴出土土器（第16図1～5）

1～3とも肥厚口縁部の壺。1は水平に近い幅広の口縁部から頸部へ続く部分と、平底の体部下半の破片で、欠損している体部には数条の断面三角形の突帯が巡るものと思われる。器外面は平滑に仕上げられており、色調は赤褐色で焼成は良好なものである。これらの土器は弥生時代中期後葉に比定できよう。3では口縁部側面に2列の竹管文を、上面に円形浮文を施す。4、5は脚付の鉢で、脚部



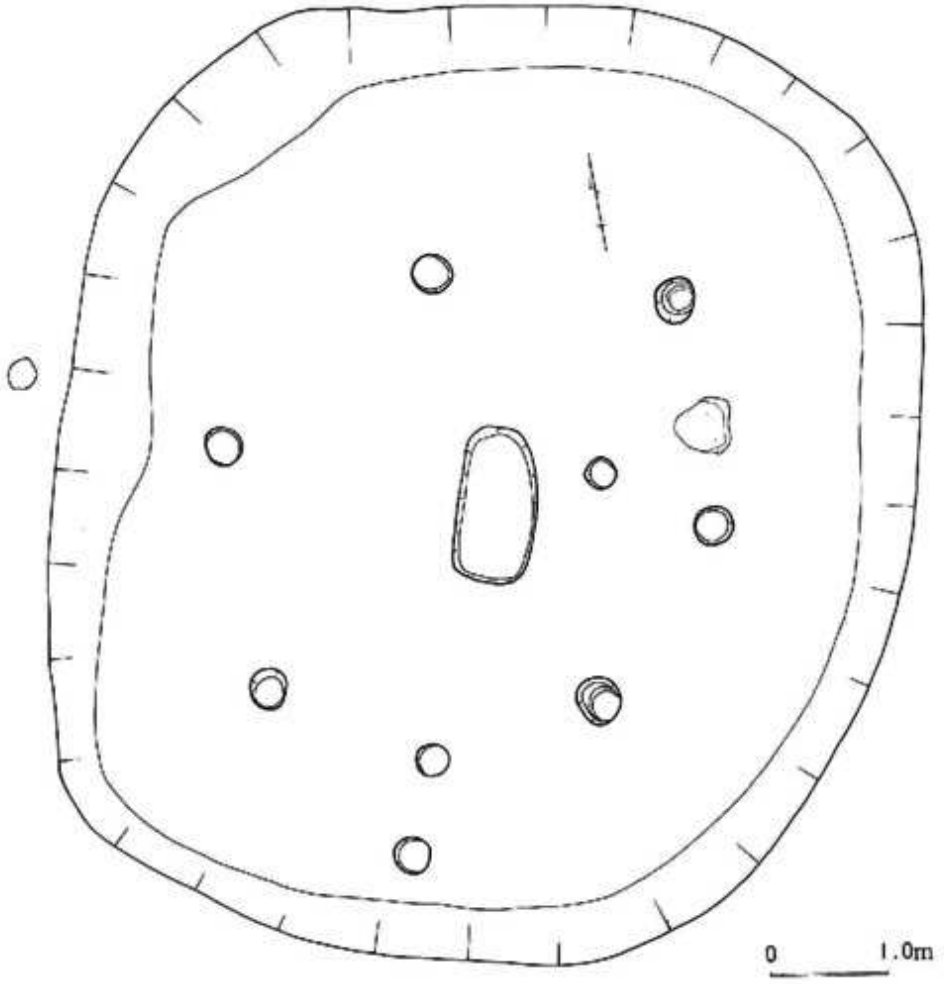
第15図　源六原遺跡３号住居跡出土の土器実測図



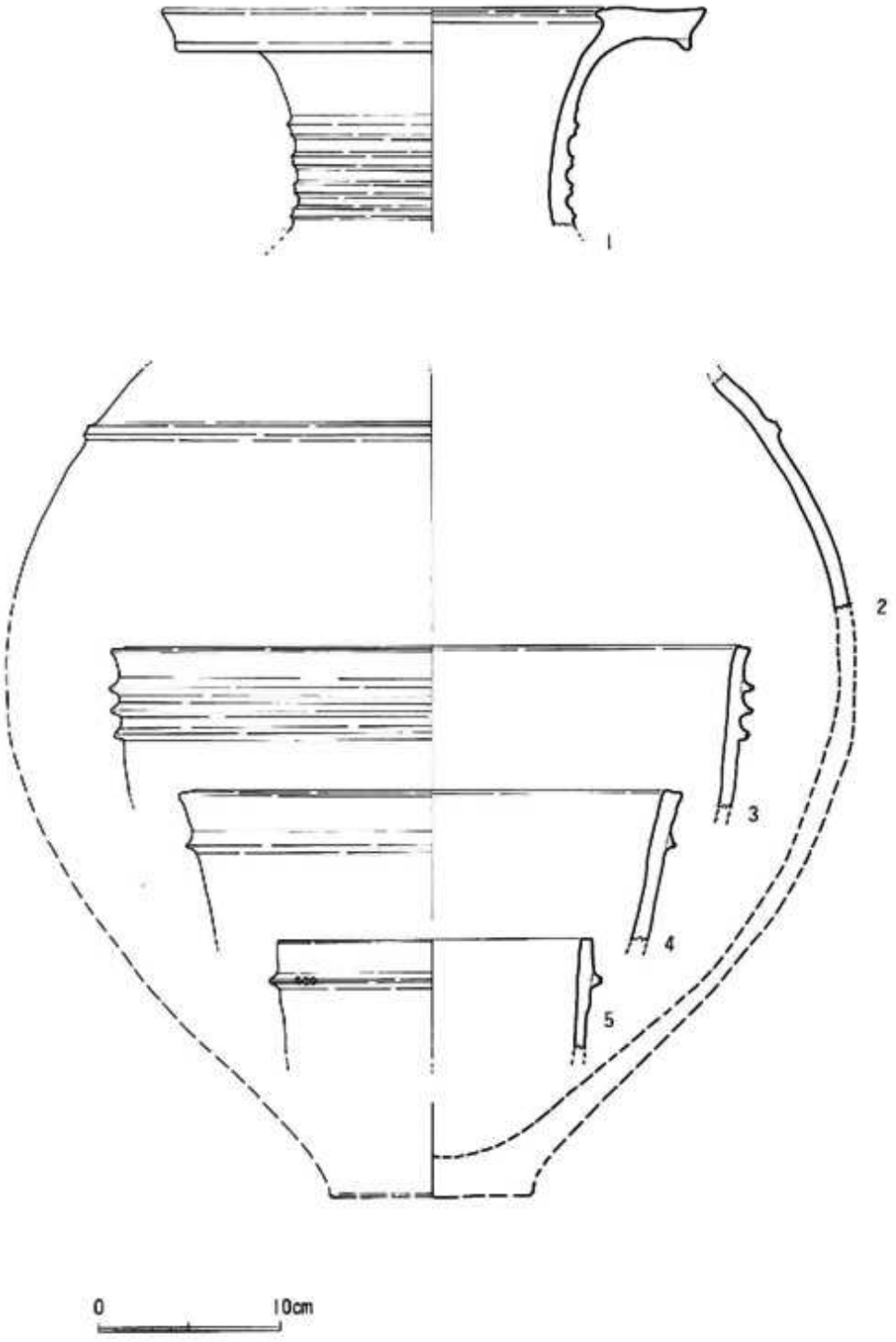
第16図　源六原４号住居跡出土の土器実測図

には長方形の透しおよび突帯がある。

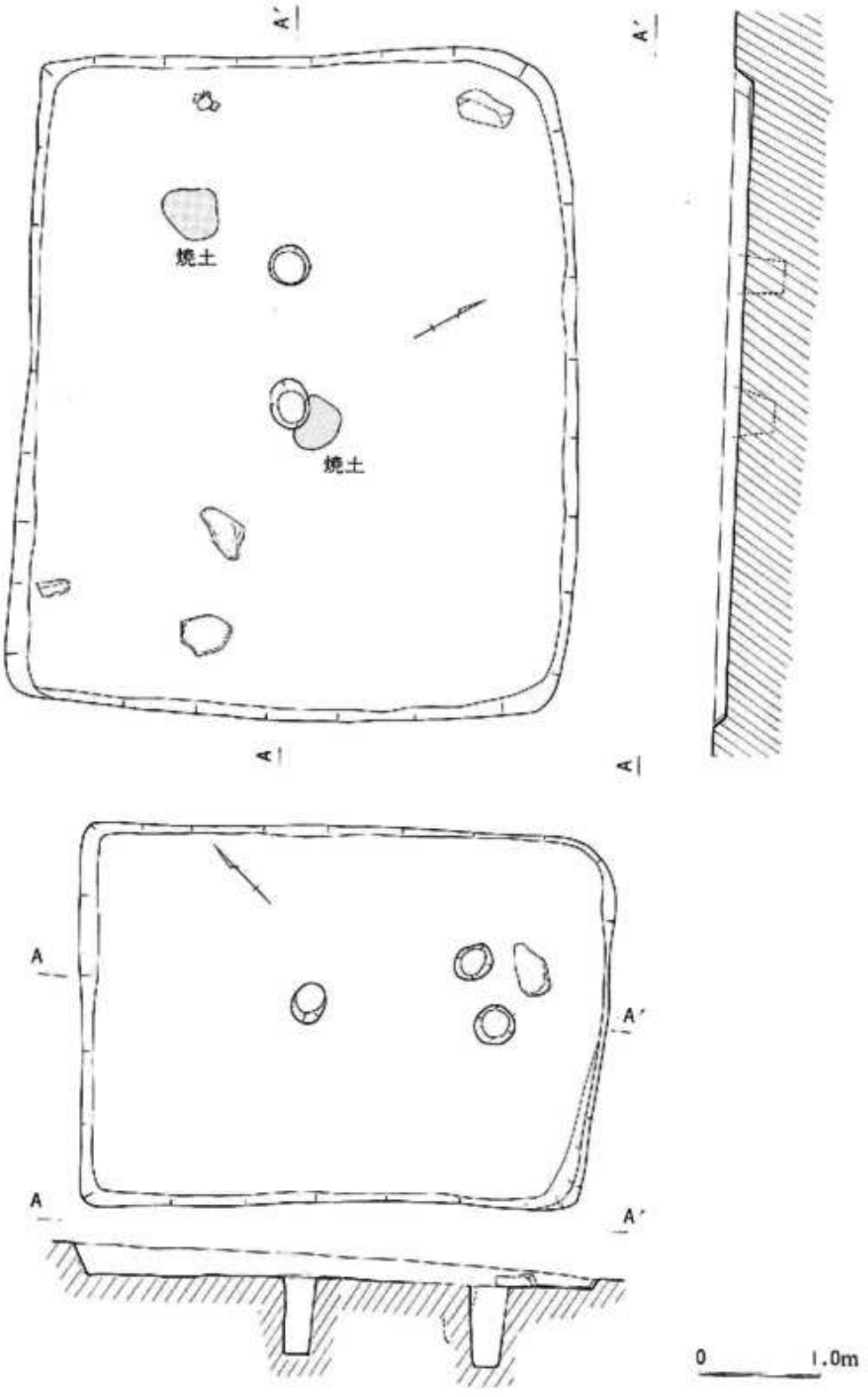
4号住居から10㍍ほど離れた場所に5号・6号・7号竪穴が比較的近接して営まれている。7号が最も大きく不整形の円形を呈する。長軸6m、短軸5mの規模で床面中央に隅丸長方形の炉がある。平面形にそって主柱穴が7配置される。6号は7号竪穴に隣接するように設けられており、径3㍍の小型の円形竪穴である。以上の2基の竪穴からやや離れた位置に5号竪穴がある。



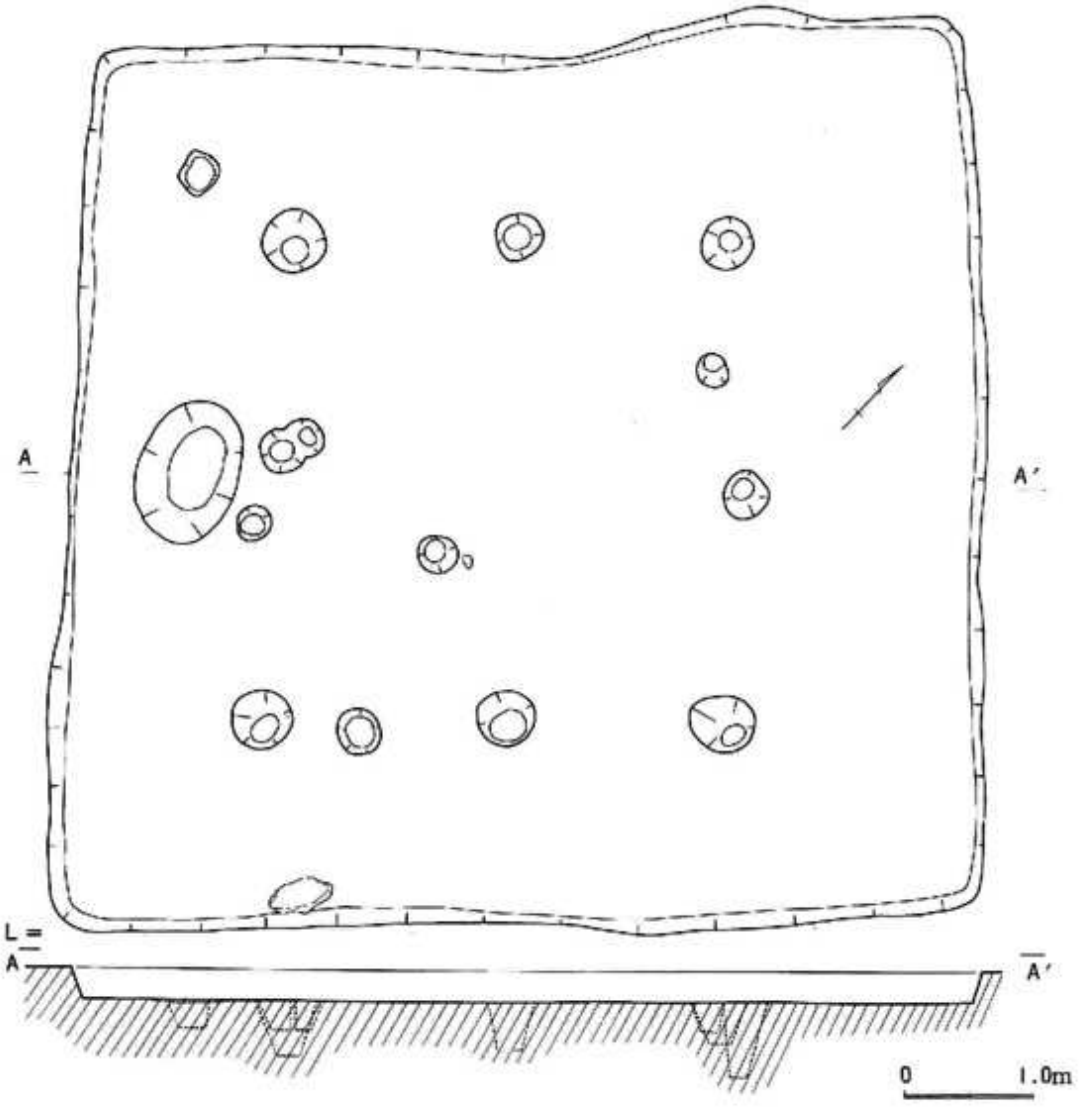
第17図　源六原遺跡7号住居跡実測図



第18図　源六原遺跡７号住居跡出土の土器実測図



第19図　源六原遺跡９号（上）・10号（下）住居跡実測図



第20図　源六原11号住居跡実測図

7号竪穴住居跡出土土器（第18図）

1は内側にやや張り出した肥厚口縁から、断面M字状突帯を多数巡らした頸部へかけての壺形土器片で、胴部上半にも同様の突帯を付けたものがある(2)。3～5は甕形土器片で口縁端部は平担に処理されている。3が3条、他は1条の刻目突帯を有している。器外面は細い縦ハケメが施されている。弥生時代中期中葉～後

葉に比定される。

8～10号竪穴はきれいな角をもつ方形の竪穴で9号が最も大きく、8号は床面積9㎡と小型である。9、10号竪穴は2本主柱を持つとおもわれる（第19図）。

これらから20mほど離れたところに源六原遺跡で最大規模の11号竪穴住居跡がある。

11号竪穴

これは1辺7mのほぼ正方形の平面プランで、深さ30cmを測る。8本の主柱を整然と配したもので南西壁際に楕円形の小土坑を敷設している。本竪穴からは弥生時代後期前半の精製甕が出土しており、8～10号竪穴とも後期に営まれていた可能性が強い。

Ⅳ　まとめ

以上の他に遺構出土を厳密に押さえられない、弥生土器が沢山出土している。これらの土器をみると源六原遺跡の竪穴は弥生時代の中期中頃～後半の時期に中心をおくもので、以後、後期前葉まで営まれていたとおもわれる。それからいったん集落は廃絶するが古墳時代初頭に再びこの地に住居跡を設け、これはすぐに消滅をしてしまう。竪穴の配置やグルーピングから推理すると、源六原遺跡の住人は主家屋とこれに付随する小家屋を一単位としており、これらの単位が数単位居住していたことになる。これらの単位を血縁を中心にして集合した家族集団ととらえることができよう。同様の単位集団は竹田市楠野遺跡でも確認されており、豊後弥生時代の山間部における、基本的、典型的な開拓集団の姿を示しているものとおもわれる。「源六原弥生村」は長期には営まれておらず、この地が安定的なものでなかったことを推測させる。竪穴から出土するものは土器を除けば、磨製の石鏃が殆どであり、鉄器はおろか、石包丁や、大陸製磨製石斧の類さえ出土していない。稲作農耕を営んでいたとは思われないようすである。おそらく、狩猟や陸耕を中心にした生業を行っていたのであろう。この地が川を中心に考えたとき、交通の要所であることを想えば、あるいはまたそうした、山の産物を他の「弥生村」と交易することによって生活を支えていた集団かもしれない。

調査風景

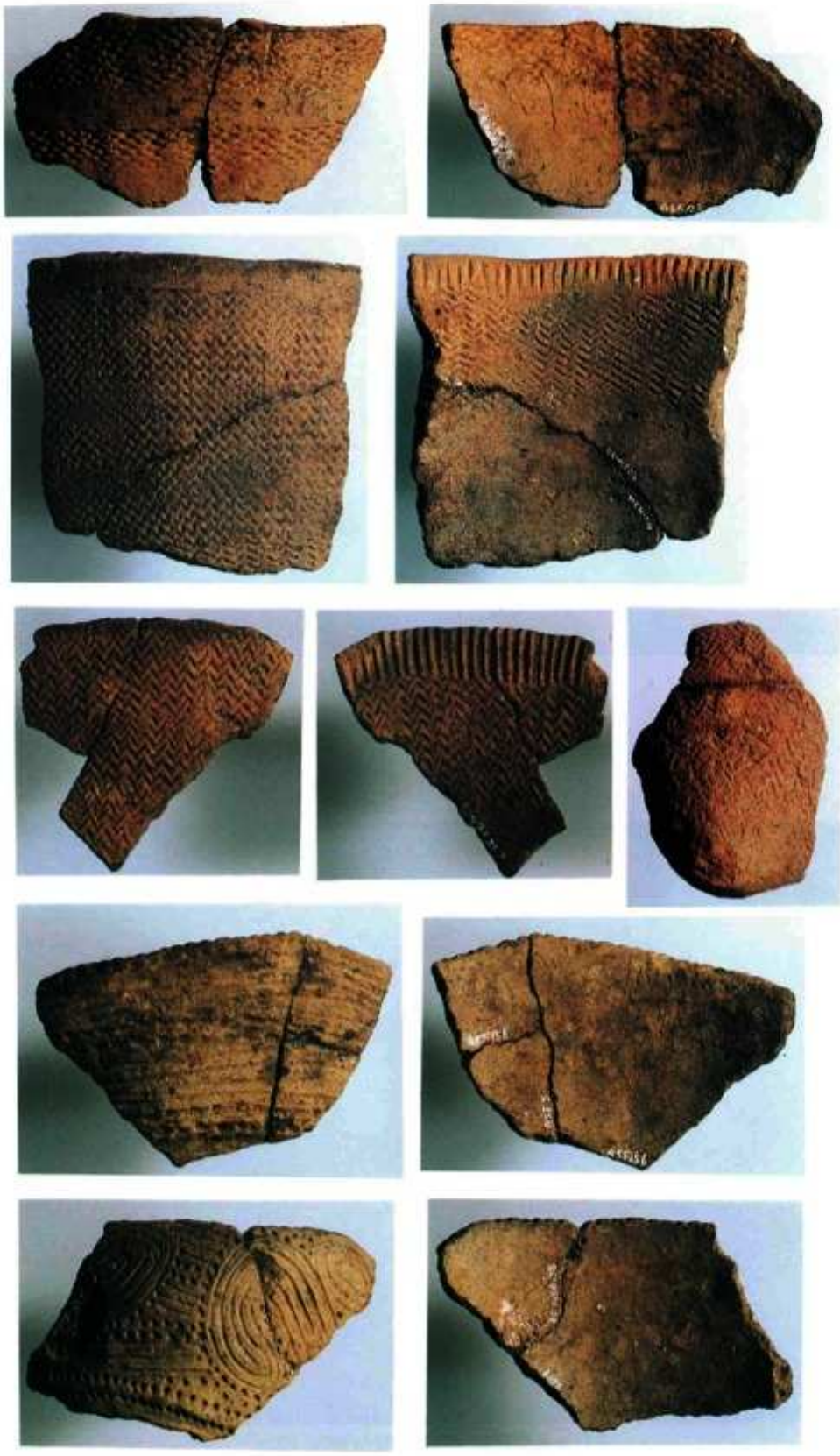
遺物出土状況

集石遺構

集石遺構

1号住居跡（上）3号住居跡（下）

9号住居跡（上）10号住居跡（下）



出土土器

出土石器